

甘利大臣のぶら下がり記者会見概要

日時：平成27年3月25日（水）13：00～13：08

場所：内閣府

【冒頭発言】

NZグローサー貿易大臣と約40分間、TPPの日NZ二国間に関する交渉を行った。結論が出たわけではないが、首脳会談を受けての閣僚会談で、期日も迫っていることであるし、交渉を加速させること、大江首席交渉官代理・ウォーカー首席交渉官との間の交渉を加速させようということになった。

【質疑応答】

（記者）

具体的な二国間の懸案事項についてはどのようなやりとりが行われたのか。

（大臣）

先方の最大関心事項はご案内の通り乳製品だが、そこでお互いの直近の立ち位置を確認した。日本側が直近にオファーしている中身、そして日NZ間の貿易量がどこを基準としているかという点、それから、この交渉にかかる日本側の基本的なスタンスを申し上げた。その起点に立って交渉を再開してほしいということを申し上げた。

（記者）

閣僚間での会談は久しぶりだが、以前と比べて間合いの詰まり方如何。

（大臣）

例えばNZから日本に対する輸出量がどのくらいか、日本の主張とNZの主張とは全くかけ離れていた。その基本スタンス、日本がどうしてそう考えるかについて申し上げ、それを起点としての議論ということでない、議論にならないという話をした。

（記者）

全体の会合を進めていくなかでは、米国のTPA法案の行方や日米の合意が推進力になると思うが、そういった点については触れられたのか。

（大臣）

会談の中ではTPAの話にふれ、TPAが交渉を妥結させる上できわめて大事ということは日NZ閣僚間の共通認識である。それは参加国すべての共通認識だと思う。TPAが早期に成立するかということについては、米国からも

楽観論、悲観論が幅広く聞こえてきており、可能性はあると思うが、楽観視もできないというニュアンスだと思う。

(記者)

NZから何らかの歩み寄りがあったのか。

(大臣)

現状のグローサー大臣の認識はこちらで把握することができた。NZの日本に対する輸出量の捉え方は、ピークのときをとらえるか、あるいは緊急輸入をカウントするかなど、いろんな数え方があるが、そこはきちんと交渉の対象物の平年度の数字だということを申し上げた。その認識にたつて交渉をすすめるということである。

(記者)

妥結の時期については閣僚間で認識を共有できたのか。

(大臣)

いつごろ妥結という話はない。とにかくTPAが大事ということ、TPAは手放しで楽観視できる状態ではないので、しっかりと注視していくということ、TPAが必須であるということ相互に認識した。

(記者)

先方の輸出量の数字をどうとらえるかなど、きわめて基礎的な、最初にやる話のような気がするが、まだまだ時間がかかりそうなのか。

(大臣)

他の国よりも、NZとの二国間がきわめて遅れているという認識に立つ方がいいということをお願いした。ただ、グローサー大臣はそのことによってこの先相当交渉に時間がかかるということはなく、こういう間合いは短い期間で詰める自信があるということをおっしゃっていた。

(記者)

今後短い時間で詰められるというのは、どのくらいのスパンで詰めていくのか。

(大臣)

私からは今後事務折衝は一度か二度というつもりでやっていかなければ、何回もやるつもりではまともないと申し上げた。

(記者)

重要五品目についての国会決議について、国内への影響をどのように考えているか。

(大臣)

今日の40分の交渉のなかでは具体的には話していない。ただ私は交渉参加以来今日まで衆・参農水委員会の国会決議については都度申し上げている。

(記者)

日米合意とTPA、二国間交渉であるNZとの合意はどのような順序になるのか。

(大臣)

まとまった順にということになるだろう。TPAが議会承認を得るのが早く来てほしいと思っているが、なかなか順序通りにいくかは予断を許さない。

以上